

ムゼーウスの「三姉妹物語」考

——記載昔話の再評価——

鈴木 満

ヨハン・カール・アウグスト・ムゼーウスの『ドイツ人の民話』(Johann Karl August Musäus: Volksmärchen der Deutschen)を構成する話の一つ「三姉妹物語」(Die Bücher der Chronika der drei Schwestern)の訳に添付した解説(武藏大学人文学会雑誌第三十一卷第三号所載)において、私は次のような趣旨を記した(原文通りではなく、一部加筆訂正した)。

グリム以降のドイツ語圏民話集の一つであるH・ブーレーの『童話と民話』所収「グーレン・ハイム、アーデルハイム、ヴァルフィルト」(Heinrich Pröhle: Kinder- und Volksmärchen. Leipzig 1853. Nr.1. Bärenheid, Adelheid, Wallfeld)は、ムゼーウスのいの物語と同工異曲だが、表題の固有名詞が動物婚に用いられる姫君の名で、それぞれ熊(Bär)、鷲(Adler)、鯨(Walfisch)と関係ある音がないし、単語か単語の一部を含んでくる。これを参考にするべく、ムゼーウスは姫君たちの名前とそれぞれの動物婚の「整合性」を尊んだとは言えない。ふわわしこのはア

一デルハイトと聲の組み合わせのみ。ベルタとガルフィルトは逆にやがれたり、ベルタとハネイハンダも、
ヴァルフィルトではなくガルフィルトとしたのも当を得てしない。
今、いの解説の増補として、右に挙げた「ベーレンハイト、アーデルハイト、ヴァルフィルト」を次に試訳してみ
る。

正典は以ての通ニ。

Hrsg. v. H. Bausinger/M.Hain/G.Heilfurth/W.Heiske/W.-E.Peuckert/K.Ranke/B.Schier: Volkskundliche Quellen. Neu-
drucke europäischer Texte u. Untersuchungen III. Märchen u. Schwank. Georg Olms, Hildesheim/New York 1975.
Kinder- u. Voksmärchen. Mit einem Nachwort v. H. Stein. Nr. 1 Bärenheid, Adelheid u. Wallfeld.

ベーレンハイト、アーデルハイト、ヴァルフィルト

ハインリヒ・プレーネ『童話の底編』より

鈴木 満訳

昔むかしお金持ちの貴族が娘を二人持つていた。名前はベーレンハイト、アーデルハイト、ヴァルフィルト。いの
人はね、僕約して暮らすつてことを存じなかつたので、とうとうすつかんぴんになつちやつた。それで食い扶持を
かせりやと、よんざりのなく狩りにでかけたんだ。兎を一羽撃つたのはいいんだけど、そりく熊が出て來たの。貴族

が自分の家来を撃つちまつたものだから、熊が言うには、

「きさま、おれの家臣を殺しおつたな。こりやきさまの命にかかるぞ。もつともきさまの総領娘のベーレンハイトをおれがもらえるなら別、それなら勘弁してやつて、なんでもたっぷりくれてやるわ」。

貴族は熊に娘をやる、と約束、家へ帰つてみると、欲しいものがなんでもわんさとあつたわけ。熊は次の日やつて来て、ベーレンハイトを連れて行く。でも熊から貰つた財産は見る見るうちに無くなつた。貴族はまたまた食い扶持(イ)をかせごうと狩りにでかけた。今度は鳥獣をやつて、鳴(レガ)を二三羽しとめたの。そこへ鷺が飛んで来て言うには、

「きさま、おれの家臣を殺しおつたな。こりやきさまの命にかかるぞ。もつともきさまの娘のアーデルハイトが手に入るなら別、勘弁してやつて、なんでもたっぷりくれてやるわ」。

貴族は一番目の娘を鷺に約束、またしても何不自由ない暮らしになります。鷺は次の日素晴らしい紳士の姿となり、足で歩いてやつて来て、二番目の娘を連れて行く。けれども貴族の身代(ヒダ)はあつと言ふ間にまた無くなつちやつた。で、今度は湖にでかけて、カワカマスを一びき殺した。すると出て来たのは鯨でね、こう言ふの。

「きさま、おれの家臣を殺しおつたな。こりやきさまの命にかかるぞ。もつともきさまの娘のアーデルハイトをくれるなら別、命は助けてやつて、なんでもたっぷりくれてやるわ」。

貴族が言うには、もう娘は一人も手放しました、自分の命が助かるなら、三番目もそれと引換えにしてもよろしくうござります、つて。鯨は次の日四頭の白馬に牽かせた馬車に乗つてやつて来て、三番目の娘を連れて行く。それからつてもの、貴族のところにやなにもかもわんさがありあまるし、この人も今までよりきちんと所帯を切り回すようになつたんだよ。

そのうち貴族には息子が一人できました。この子が十五になつたとき、ほくはお姉さんたちを助けることができる

んだ、という夢を見たの。それで旅に出ることにして、お姉さまたちの行方はなにも分からなかつたけれど、森のなかへと分け入つた。するとでくわしたのはひとりの白装束のこびと。⁽²⁾これは地面の下に住んでいる呪われた精でね、自分の体を大きくも小さくもできるの。こういう種族は以前はたくさんいたんだよ。こびとが言うには、気をつけなさいよ、近くに熊の洞穴があるから、と。それこそ願つてもない、そこへ行きます、と若さま。そうやつて進んで行くと、うまいことに、あの古熊^{ふるぶき}が獲物を探しにでかけて留守にしているとき、洞穴に着いたんだ。この洞穴は中に入つてみるとすてきな御殿^{ごてん}でね、そこにお姉さまのベーレンハイトが座つていて、二ひきの子熊にお乳を飲ませていたの。お姉さまは弟をおもてなしして、一晩引き止めて、熊からかくまつてくれる。一時間すると古熊がもどつてきて、自分の住処^{すみか}の洞穴に知らない人間の肉の臭いがする、つてふんふん嗅ぎ廻つた。でも奥さまが、あなたつておばかさんよ、知らない人間の肉なんであるもんですか、と言ふと、熊は気持ちを落ちつけて奥さまの足元で寝込んでしまう。真夜中にお姉さまは熊から三本の毛を引っこ抜いて、弟に言います。困つたことになつたら、この毛をこすりなさい。そうすれば熊が助けに来てくれるわ。これからふたりの妹たちを捜しに行つてちようだいね。そうして二番目のお姉さまが住んでいるところを教えてもられる。若さまが出発する前に、熊も目を覚まします。そのときは王子さまの姿になつていて、二ひきの子熊もちいちやな王子たちなの。それから熊の洞穴中にティンパニーと喇叭^{らっぱ}の調べが響きわたつたのだよ。王子さまはりっぱな様子で義弟^{めいだい}と仲良くお話しして、これからそなたが向かうことになる鷲と鯨はわたしのきょうだいだ、と言つたのさ。

今度若さまが入り込んだのは木がぎつしり茂つた森のなか。そこで見つけたのは大きな鳥の巣がある樅の樹。攀じ登ると二番目のお姉さまがみつかつた。巣のなかにはこれまでてきた御殿があつたの。お姉さまのアーデルハイトはそこについて、鷲の卵をふたつ、体の下で温めて孵^{くえ}そうとしていました。このお姉さまも弟をおもてなしして、それ

から暖炉の煙出しのなかに隠してくれた。やつぱり一時間経つと鷺がやつてきて、アーデルハイトはやつとのことで驚をなだめたのさ。だつて、知らない人間の肉の臭いがするつてふんふん嗅ぎ廻つたものだから。でも気が休まると、奥さまの足元で寝入つてしまつた。そこでアーデルハイトは真夜中に鷺から三枚の羽を抜き取つたんだよ。そしてそれを弟に渡して、これをこすると、四方八方から助け船がやつてくる、つて言いました。この鷺は翌朝になると、すつかり物分かりがよくなつた。元通り美男で立派な王子さまの姿にもどつて出て来たのだけれど、相変わらず森の鳥たちに指図をしてはいた。お姉さまは弟を旦那さまに引き合わせ、旦那さまは、どうすれば義弟が三番目のお姉さまのところに行き着けるか、よくよく説明。ふたりは若さまに食料を持たせ、三番目のお姉さまのもとに行く道筋を書いてくれた。でもとうとうなにもかもぱつと消え失せ、弟は、遠くから大きな鳥の巣があるのが見えた、あの樅の樹のうえにひとりつきり取り残された。

そこで若さまは樅の樹から地面に降り、とある大きな湖の岸辺にやつてきた。湖の真ん中に鯨の御殿の煙出しが突き出しているのが見えただけれど、どうやつて湖を渡つてその御殿まで行けばいいかわからない。そこで、あの三枚の羽をこするとね、早速鷺が飛んで来て、煙出しのところまで運んで行つてくれた。御殿は透き通つていて、水晶でできていた。ヴァルフィルトは弟をおもてなしして、かくまいます。またしても一時間すると怖らしい鯨がやつてきて、知らない奴がいるつてことは分かつてゐるんだ、と言いました。奥さまがなだめると、鯨は奥さまの足元に横になつて眠つちゃつた。真夜中にヴァルフィルトは相手の体から三枚の鱗^(うろこ)をはがして、それを弟にやつて、困つたことになつたら、この鱗をこすりなさい、そうすれば、助けてもらえるわ、つて言いました。ヴァルフィルトはこうも言つたの。どうすれば弟が、三人のお姉まと、それから熊と鷺と鯨を救い出すことができるか、つて。教えてくれたのはこういうこと。ケンブリッジの谷に牡牛が一頭いる。これを殺さなくちやいけないの。牡牛ははらわたのなかに鍵を

一束持っています。この鍵を手に入れて山のてっはんに登り、そこにある熊と鷺と鯨がもともと住んでたお城の門を開けなくちゃいけません。このお城のなかに大きな大理石の石盤があるから、これを地面に投げつけて、三つに割るんですよ。そうすれば、眠っているようにと呪いをかけられている、三人兄弟のお父さんが目を覚ますでしょうね。

弟がケンブリッジの谷にやつてくると、牡牛が目に入る。牛がすたずたに引き裂いてやろうと駆け寄つて来たので、こちらは木のうえに逃げる。すると牡牛はその木を角で掘り倒そうとする。でも若さまが熊の毛をこすると、すぐに熊が姿をあらわしてね、牡牛を絞め殺してしまいます。けれども鍵束ははらわたごと水のなかに転がり落ちてしまう。そこで弟があの三枚の鱗をこすると、お魚たちが鍵束の入っているはらわたを水のなから投げ返してくれる。弟ははらわたを手にとつて開き、山のうえに登つて、お城の門を開けると、大理石の石盤と眠っているお年寄りが目に入ります。そこで石盤をつかんで地面に投げつけ、三つに割ると、眠っていたお父さまが目を覚します。そしてこのひとの三人の息子たち、熊と鷺と鯨は、その子どもたちといっしょに魔法を解かれ、みんな綺麗な王子さまになつたとえ。

注

- (1) 熊は次の日やつて来て 人間の姿にもどり、それも立派な装いでやつて来たはずだが、それには何も触れていない。
- (2) 白装束の「」びと ein weißes Männchen 「白衣の」びと」とは訳せまい。「白衣の」びと」である。この由来 (weib) という形容詞で、次の「呪わされた」という、キリスト教から見た異教時代からの民間信仰の残滓に対する否定的表現にもかかわらず、主人公の援助者として善の側に立っていることを示している。
- (3) ケンブリッジの谷 Cambridgethal この固有名詞はどうしても英語綴りとしか思えないのに、英語発音で表記した。語り手が、ドイツ語圏の住民の耳にこころぶる異様に響く地名に仕立てよう、と工夫したものか。

(4) はらわたのなかに 原文では „Dieser Stier trug in einem Gewande ein Band Schlüssel“ であり、これでは「衣服のなかに」と訳せねるを得ない。Im Eingeweide (衣藏のなかに) の誤記 誤訳がと思われる。

(5) お魚たち die Fische 魚が救援に登場しないのはおかしい。

(6) ……なへたいへ。 主人公である若さまによる美しいお姫さまの救出も、彼女との幸せな結婚も、お姫さまに横恋慕したよしまな魔法使いの存在もなし。もともと後者は、若さまの冒險の冒頭に登場して、彼を援助してくれる地面の下に住むいごとに奇妙なくらいに変容してしまったのかも知れない。

結局この話は、随所に欠落があり、動物の姿の義兄たちの援助も、その一つ、鶯の羽はうまく使われていないなど、混乱していることが分かる。ただし、若さまの固有名詞が出てこないのは、昔話本来としては自然である。三人の姉たちに名があるのは、それぞれその名に相応する動物婿の配偶者となるように、筋のうえであらかじめ約束されているからに過ぎない。

口承昔話の口承過程における歪曲、誤伝、欠落は、語り手と聞き手が優れていないかぎり、いつの時代、どんな環境でもかならず起つりうることであろう。ムゼーウスのような文人が介在して、物語作者として納得のゆくものに補修し直すことは、口承文芸の側からみても、けっして無下に避けられない。グリム兄弟の『子どもと家庭のための昔話』(Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm) やヴィルヘルム・グリムがした作業、すなわち、べくつかの断片を繋ぎ合わせ、その欠落は、いつであつたらと推定される妥当な接着材料を考えて補い、首尾一貫した物語を提示したこととは肯定的に評価してよい、とかねてから私は考えている。また、たとえば「二人兄弟」型昔話が長い生命を保つてきたのは、その伝承過程で古代エジプト（第十九王朝）ではパビルス文書とそれなりなど、記載化がおなわれたのが口承に大いに力を添えたと思われる。アーロッパでのストラパローラ (Straparola: La piacevole notte.

1550-1554. 『辻かれ十三夜』、ベシーヌ (Basile: Pentamerone. 1634-1636. 『ベンタメローネ』)、ペロー (Perrault: Contes de ma mère l'Oye. 1697. 『鶯鳥小母のね話』)、そしてムゼーウス、日本での景戒 (『日本国現報善惡靈異記』の著者)、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』の知られる編者たち、更には「お伽草子」を形成する物語の作者たちは、民間伝承の筆録、文芸作品化という業績ばかりでなく、いうした文献を読み、聞も、話して民間にもたらした無数の人たちによる再口承化の面でも重要視されるべきである。文字の発明以来、識字層が確固として存在する社会であれば、書物への記載と民間での口承は持ちつ持たれりで、口承文芸の生命を保ってきたのであり、純粹培養の口承文芸などはそうした社会ではありえなかつたはず、と私は確信する。

前記グリム兄弟の『子供と家庭のための昔話』の一八二一年の初版に収められた KHM82 „Die drei Schwestern“ (『三人姉妹』) について、兄弟は彼らの注で、彼らが口承昔話をも用ひはしたもの、いの話の土台がムゼーウスであることを記している。ふねく。「このメルヒュンは頻繁に耳にされるが、本質的には常にムゼーウスの物語と一致してゐる。そつこつわけで、いのじめやへ思ふよへ。ムゼーウスは彼独特的、くらか冗長な流儀と魔法使いソルヌックのハピホーム、そして更には、固有名詞を付け加えたに觀ねなご」と思われるが。奇跡の子ライナルトの名は別である。(中略) それ以外でもむしろ民衆的に感じられるいのには、ムゼーウスも手を付けてゐなご」 (Dieses Märchen wird oft gehört, aber allezeit stimmt es der Sache nach mit der Erzählung des Musäus, so daß man es auch hier so finden wird. Er scheint nur die ihm eigentümliche, etwas breite Manier und die Episode von dem Zauberer Zornbock, ferner die Namen hinzugestan zu haben, Reinhard das Wunderkind ausgenommen..... Auch sonst ist aufs Musäus beibehalten, was noch volksmäßig schien.) それなのい、ヤーロア・グリムは、トレーナ・フォン・アルリヒに宛てたある書簡 (一八二一年一月七日付) のなかでいのメルヒュンに觸及、全編中で最悪なる、と述べてゐる。「疑ふも

なく眞物で、作り物ではないのだが、これには口承文芸の新鮮さが全く欠けているのです」と。(wiewohl un-streitig echt und unerfunden, fehlt ihm durchweg das Frische der mündlichen Erzählung.) 「よく単純にムゼーウスとグリムを読み比べれば、後者が前者を読んだ者によつて口承されたことが分かるし、そして、話の筋が首尾一貫しているのは、ムゼーウスの記載化によるところ大であり、そのため素朴な風韻は確かに乏しいにしても、プレーレが収録したものよりおもしろさは遙かに増している、とも感じるのだが、いかがなものだろう。

更にバジーレの『五日物語』の「動物にされた三人の王さま」(四日目第三話)を見ると、ムゼーウスの力量には並々ならぬものがある、との感慨を禁じえない。この話の粗筋を纏めてみよう。

ある国の王が三人のことなく美しい姫君を持つていた。他の王国の三人の王子が彼女たちに求愛するが、父王は承知しない。なぜならこの王子たちは魔女の呪いをかけられて動物の姿に変えられていたからである。長男は鷹、次男は牡鹿、三男は海豚というわけ。拒まれた王子たちはそれぞれの配下に命じて王国を荒廃させる。王は止むを得ず姫たちを結婚させる。鷹は長女の姫を高山の頂きに、牡鹿は二番目の姫を深い森の中に、海豚は末の姫を大洋のただなかの島に連れて行き、そこの素晴らしい宮殿に住まわせる。ただし、動物たちが人間の姿にもどる期間はない。やがて姫たちの両親に男の子が生まれる。この子ティットーは十五になると姉さまがたを探しにでかける。世界中旅したあげく、彼は三人の姉たちにめぐりあい、その夫たちからも親切にもてなされ、別れ際に餞別として、鷹からは一枚の羽、牡鹿からは一本の毛、海豚からは一枚の鱗をもらう。とても困ったときには、それを地面に投げ、出てこい、と唱えろ、と言われて。やがてティットーは怪奇な森にやつてくる。森の中央に湖があり、その中の高い塔に美しい乙女がいるのを見つける。乙女の足元には恐ろしい竜が昼寝している。乙女(さる国の中の王女)

は自分を救つてくれ、とティットー¹ネに訴える。こちらは躊躇するが、姉の夫たちからの餞別を思い出し、言われた通りにする。鷹と牡鹿と海豚が現れる。鷹は塔に飛んで行つて乙女をつかんで来る。竜が目を覚ましてティットー¹ネに襲いかかろうとすると、牡鹿が猛獸たちをけしかけて竜を引き裂かせる。海豚は津波を起こして塔を倒す。そして動物たちは人間の姿を取り戻す。なぜなら、彼らの言うことによれば、自分たちにかけられた魔女の呪いを解くには、王女を危険から救い出さねばならなかつたのだが、これでそれが果たせたのだ、と。五人はティットー¹ネの両親の王国に赴く。旅の途中、動物だった王子たちはそれぞれの妻を迎えて取る。ティットー¹ネは救われた王女と結婚する。

この記載昔話の欠点は少なくも五点ある。以下に箇条書きにする。

- ①動物婿たちがその結婚生活中人間の姿にもどる設定がないこと。これでは宮殿がどんなに立派であろうと、その妻たちは心慰められることはあるまい。従つて、聴き手ないし読者には少なからず不満が残ろう。
- ②ティットー¹ネが竜にさらわれた王女を発見するのが、全くの偶然に他ならないこと。このように話の構成がルーズでは、興味が盛り上がらない。
- ③ティットー¹ネが勇ましくないこと。これが欠点であることは説明するまでもない。
- ④牡鹿が、自分ではなく配下の猛獸たちに竜を退治させること。さして強からぬ鹿の身であつてみれば仕方がないのかも知れないが、それなら鹿でなく獅子か熊にしておけばよかつたのである。素朴な形式から逸脱している。
- ⑤海豚の出番は、全て終わつたあと塔を倒すに過ぎないこと。役割分担がきちんとされていないので、かなり興味が削がれる。

無いものねだり、とのやしりを免れないかも知れないが、ついでにむべ一つ不満を挙げておけ。ムゼーウスでも、ブレーレードも、そして KHM197 „Der Kristallkugel“ ([水晶の珠]) でも重要なモティーフとなつてゐる卵の奪取がこゝにはない。前二者では鍵が入つて「ぬりふになつて」いるが、本来こゝの卵の中には敵役の生命が藏されているのであって、そのため敵役はあらかじめ対策を講じており、手を変え品を変えこれを守ろうとし、かたや主人公側は必死にそれを追求する。その息をもつかせぬ緊迫感がよいのだが。

なお、整理のため言わゆるがなのことを付け加えると、今回の論考に記した一連の話型は Aarne/Thompson: „The Types of the Folktale“ によつて五五二番、すなわち AT552 ‘The Girls who Married Animals’ (動物と結婚した娘たち) である。つまり異類婚の、男性が異類、女性が人間の話だが、こゝのように幸せな結果になる。日本では、男性が異類、女性が人間の場合、異類はあくまでも異類で、人間の妻、ないしその親族の手にかかりて殺される「蛇婿」、「猿婿」、「鬼婿」がこの話型の類話として挙げられるが、適切ではない、と、私はかねてから考えてくる。なにしら、AT552 の婿たちは、動物の姿をしてくるとはいへ、魔法にかけられての変身なのだから。結局対応する話型は日本にはないのではないか。水神様の申し子として田螺の姿で生まれた息子が、策略を弄して長者の娘を妻とし、その女性が誠意を尽くしたお蔭で、人間の姿を取り戻す「田螺息子」(関『日本昔話大成』一三四) が似ておりはするが、こゝれはこれまで異常出産によつて異形の姿で誕生した、あるいは魔女に呪われて動物の姿にされた男性主人公が呪いを解かれるなど) の AT433 ‘The Prince as Serpent’ (蛇王子) の他、一連の関係ある話型 AT425 ‘The Search for the Lost Husband’ (消えた夫を探す)、AT425A ‘The Monster (Animal) as Bridegroom (Cupid and Psyche)’ (怪物〈動物〉婿 (クピューディー&ペシケ)) がこゝへのみ海外にあるので、こゝれを以て対応する類話とするのも無理がある。